

随想



歴史と自然

村上望城

九月のはじめ、京都の名刹と兼六公園を訪ねた。

青蓮院の霧島の庭という枯山水庭園、天龍寺の曹源池を中心に亀山を背景とした借景式庭園。竜安寺の白砂の中の石組、禅味あふれる幾何学的図形美等、日本心の侘び寂の趣、その格調高い美しさに魅せられた感動は、今も私の心の中に鮮かに浮んでくる。

特に名園の説明時、小堀遠州や細川という名が出てくるたびに、水前寺公園や泰勝寺、熊本城や本妙寺の様子を、二重写に頭に浮かんで、思わず何ともいえぬ恥かしさ、心苦しさ、相濟まなさといっ

た複雑な気持ちになった。次の日、金沢の兼六園を歩いた時は一層感懐深いものがあつた。

京都の各庭園や兼六園が、造園の妙はいうまでもなく、綺麗な珍らしい幾種類もの苔が、大小の木陰、園の隅々まで、絨毯を敷いたように茂り、雑草や塵は全然見当らぬまでに手入が行き届き、すべてが清潔なのに比べて、熊本のはどうも、ややもすれば関係者は無愛想。その上、足をとめ、魅せられ引きつけられるものが必ずしも多くないのは、どこに原因があり、どうすればいいのか。

阿蘇は外輪山の内側に採石場があつたりして、全日本人の財産である大自然が、大きく破壊されつつある。

湖底からきれいな水が湧き出て、二米以上もの澄みきつた所に、鮭や鮎の泳ぐ絵の様な姿が、上江津全体にあつたのに、今は汚水の湖となつてしまった。

戦前の加勢川は、益城町の素麺流から嘉島町や江津湖の出水を集めて流れていたのに、川尻町までの沿岸の人々は、飲み水にしていたものである。

三日間水分をとらぬと人間は死ぬし、五分間空気がなくなると全人類は死滅する。そんな重要な水と空気をきれいにすることは、人間が最優先的に努めねばならぬことである。

亀井勝一郎の「人間の生命を支えてい

る根源のもの、それは水だ。生まれたときの最初の母乳の一滴から、息をひきとるとき最後の水の一滴にいたるまで」という言葉を思い出しながら、兼六園の池に自分の影を見て、ふと坪井川や江津湖のことを思つて溜め息をついた。

中国の書に、「水濁れば則ち尾を掉るの魚なし」とある。水の濁っている所には尾を掉って楽しみおよぐ魚がない。苛政の下には逸楽の士なし、というのである。「水広ければ魚遊ぶ」という諺は、仁徳を積んだ人には自然に皆が帰服するという意味をたどったものである。

加藤清正の治山治水、細川文化の一つの遺産、熊本城、水前寺や泰勝寺にその仁政をしのび、その歴史伝統に磨きをかけることと、阿蘇などの自然を生かすことに全県民がまごころから意欲をもやせば、その美しい心が、観光客を動かすのである。魅力は作られるものでなく、相手に行ってみたくなる気持ちを起させるものを、みんなで協力して生み育てるものでなければならぬ。

通潤橋をつくって、多くの水田を拓いた布田保之助翁の銅像が、その業績を称える矢部町の人々のまごころで、清正公と細川忠利公の銅像に次いで、十二月中には完成する。観光資源が一つふえる。「美しい豊かな郷土をつくるのは誰か」(RKK学苑専務理事)

教育雑感

米村幸子

十月三十日に県道徳教育研究会が、熊本市の白坪小学校と花陵中学校で行われた。午前中に公開授業とその研究会があり、午後の全体会でマリスタ学園長のパトリック・フランシス先生の講演があつた。

その初めに「日本の学校も米国のように、先生達が身の安全を考えなくてはならぬ時期が近い将来やってくるのではなにか」とのショッキングなことは。私は、何のことだろうと不思議に思っているうち、校内暴力教室のことだと聞き、啞然としてしまった。

ところが、十一月初めの熊日社説にも、暴力教室のことが書いてあり、熊本にもその心配があるとの話に背筋が寒くなる思いがあつた。

今、担任している小学校一年生は、本当に素直な明るい子ばかりなのに、いつからそんな悲しい性格に変わっていくのだろうか。

マリスタ学園長が言われたように、そんなことにならないよう、みんなで対策を考えていかなければならないと思う。

今の世の中では種々問題が多い。第一に、家庭環境や躾の問題、次に、テレビの影響、学校の問題、社会の問題等々。全く大人でも頭の痛いことばかりである。

しかし、何といつても子供が影響を受けやすいのは、家庭である。赤ん坊の時から、両親の真似をしながら、いろいろなことを学んできたのであり、ことわざにも、「三つ子の魂、百まで」ということがあるように、小さい時の生活習慣が一生を支配する。

私の組にも四十一人の子どもがいるが十人十色というか、四十一人四十一人色で、箸や鉛筆の持ち方一つにしても個性がある。私が鉛筆を正しく持つように、輪ゴムまで指にはめさせて、何度指導してもゴムをはずすとまた元にもどつてしまふ。

特に、今は子供の数が少ないので過保護型の家庭が多い。そういう家庭からは家庭内暴力が起り易く、登校拒否も出でくる。

また、この二、三年離婚が多くなり、どの組にも数人の離婚家庭の児童がいるようになった。子どもにとって離婚程かわいそうなことはない。その欲求不満から非行へ走った実例も知っている。

もう一つ何とかしてほしいものに、テレビがある。番組の中にピーマン白書とかいう暴力教室が出てきたり、〇〇殺人とか××殺人事件とか、犯罪をそのか

すようなものが毎日のように出てくる。

それを親が見れば子どもも見ると。テレビは青少年も見ているということを考えて、健全な番組を作つてほしいものである。

私も定年が近い。今まで担任した二十人近くの子供達が、これから先も、人に迷惑をかけないで明るく幸福な人生を送つてくれたらいいなあ、と願っている。(小学校教員・書家)

満ソ殉難記

を讀む

樋口欣一

泉可畏翁氏の執筆編集になる満ソ殉難記を読んで感銘をうけた。これまでもこの種の著述は沢山出ているが、概ね局所的・部分的なものが多くて、これほど熊本関係者の足跡と悲劇を織りまぜて、しかも全体像をあますところなく集大成するという編集の苦心は並大抵のものではなかったろう。別冊ともゆうに八百頁をこえる浩瀚な血涙史によつて、異境に骨を埋めた同胞の無念は後世へ読みつがれ、乱世の代の証文として伝えられることになった。十年にも及んだという編者の筆削推敲の努力を多としたい。

私もソ連参戦時満洲にいたが、もし最初の赴任地の八面通にいたら、どういう結末を得たであろうか。第五軍の「と号作戦」で牡丹江にそのままいたら、どうしていたろうか。開戦後にたどりついた方正や延寿方面からの開拓団員に、一面坡の軍糧秣を放出してさらに西行をすすめたが、その前途にはどんな運命が待ちかまえていたのだろうか。読み進むにつれて、生き残った私が一転して死と同居する可能性が随所にあつたことを、今更のように思い知るのである。全く人の生死は紙ひとえの差としか云いようがない。

そして、別冊の殉難者名簿の中に同じ部隊の軍属の名前を発見して、胸のつまる思いがあつた。私の部隊は教化の本隊から離れて、浜江線沿線での一会戦用の被服、糧秣を補給する野戦貨物廠の出張所で、開戦の寸前にはほぼ東満地区からの移送、野積みを終つた。

開戦になると本廠との連絡は途絶えてしまい、一面坡駐屯地司令官の区処にはいった。その命令で軍属は家族ともども新京へさげられるため、特別編成の客車で倉皇として出発させることになったのである。

五十名近くの軍属の中に、熊本県人はたったひとり、まだ独身の阿蘇郡出身者であつた。私は彼に餓餓とともに、それまで雇用していた隊長章をばづしてこつづけ、もし熊本へ帰れたら留守宅をた

づねてほしいと伝言を依頼した。残るも死、去るも死の覚悟ながら、まさかのことが起つたのである。特別仕立の列車は不運にもハルピンで打切られ、収容所で越冬の羽目になり、僅か四か月後の一月八日には悲運の日を迎えられていたのである。

あれから三十五年、あの時彼は安全な後方へさがるのでからといって、護身用のピストルを私に残してくれた。一面坡駅頭での別れが走馬灯のように思い起されるのである。

最近、親戚の者から「満鉄王国」という本を書いたといつて送つて貰つた。満洲電業に身をおき、満鉄人の岳父をもつこの著者の満鉄への思慕は暖かく、又ユニークなこの事業体の生成・発展ぶりが人間中心にえがかれていて大変面白い。前書をハードな側面とみれば、これはソフトな側面史といえよう。

著者は最後にこう結んでいる。大陸に勢いよく噴出した日本民族のエネルギーが、忽然として消え失せたという半世紀足らずの歴史は永遠に消えることはない。そして、後にこれを知る人びとは、何かホームの一大叙事詩「イリアド」の吟誦でも聴くような、長く苦しい悲しみを噛みしめることだろう、と。

大いなる徒勞というだけではあまりに淋しいこの歴史を、大切にしなければならぬと思つたことである。(御金龍堂社長)